

学術情報発信WGの報告について

倉田敬子(慶應義塾大学文学部)

学術情報基盤とは

- 各WGでの「学術情報基盤」
 - コンピュータ資源（研究活動支援）
 - 大学図書館（教育＋研究支援？）

研究成果発信・流通の場としての学術雑誌

* 大学でも図書館でもない

学術情報発信WGの目的(範囲)

- 日本の学術情報発信の現状と課題



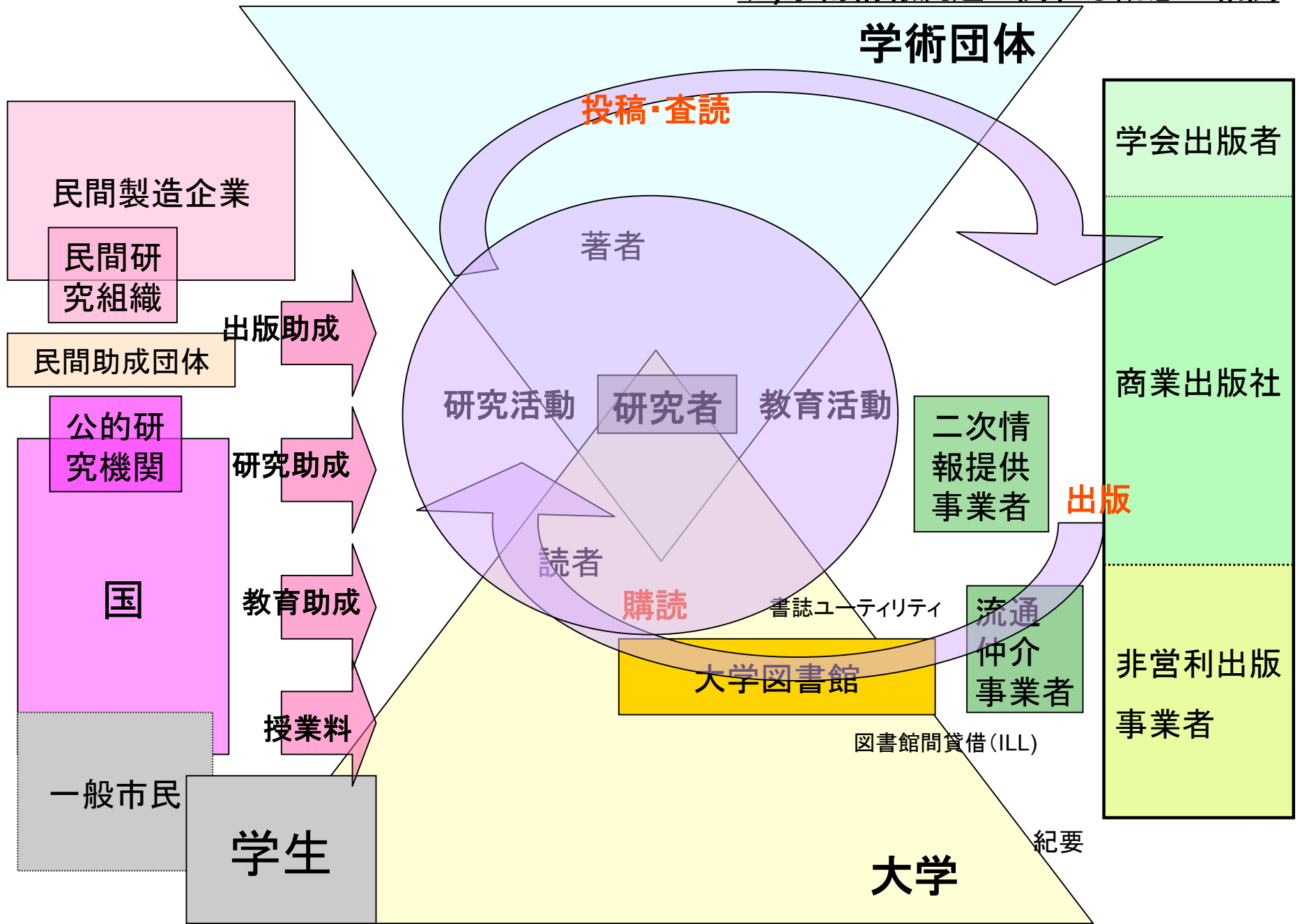
グローバルな学術情報流通の現状認識

- 学術情報流通の特異的性質
 - 電子化・OA等の新しい動向把握
- 誰に対する提言？ 学会？ 文科省？

学術情報流通ステークホルダー

- 研究者 著者(投稿)／読者(利用)
- 大学(研究・教育支援)
- 出版社(者)
 - 学会(査読、編集)
 - 商業出版社(編集、流通)
- 大学図書館(購読、組織化、提供、保存)
- 政府(科学活動支援、学術雑誌支援)
- 民間企業(研究助成、成果利用)

(1) 学術情報流通に関わる概念の相関



学術情報流通の変容

1) 20世紀の特徴

- 商業化 商業出版社の台頭
クラブ財から商品へ
- 大学図書館への依存

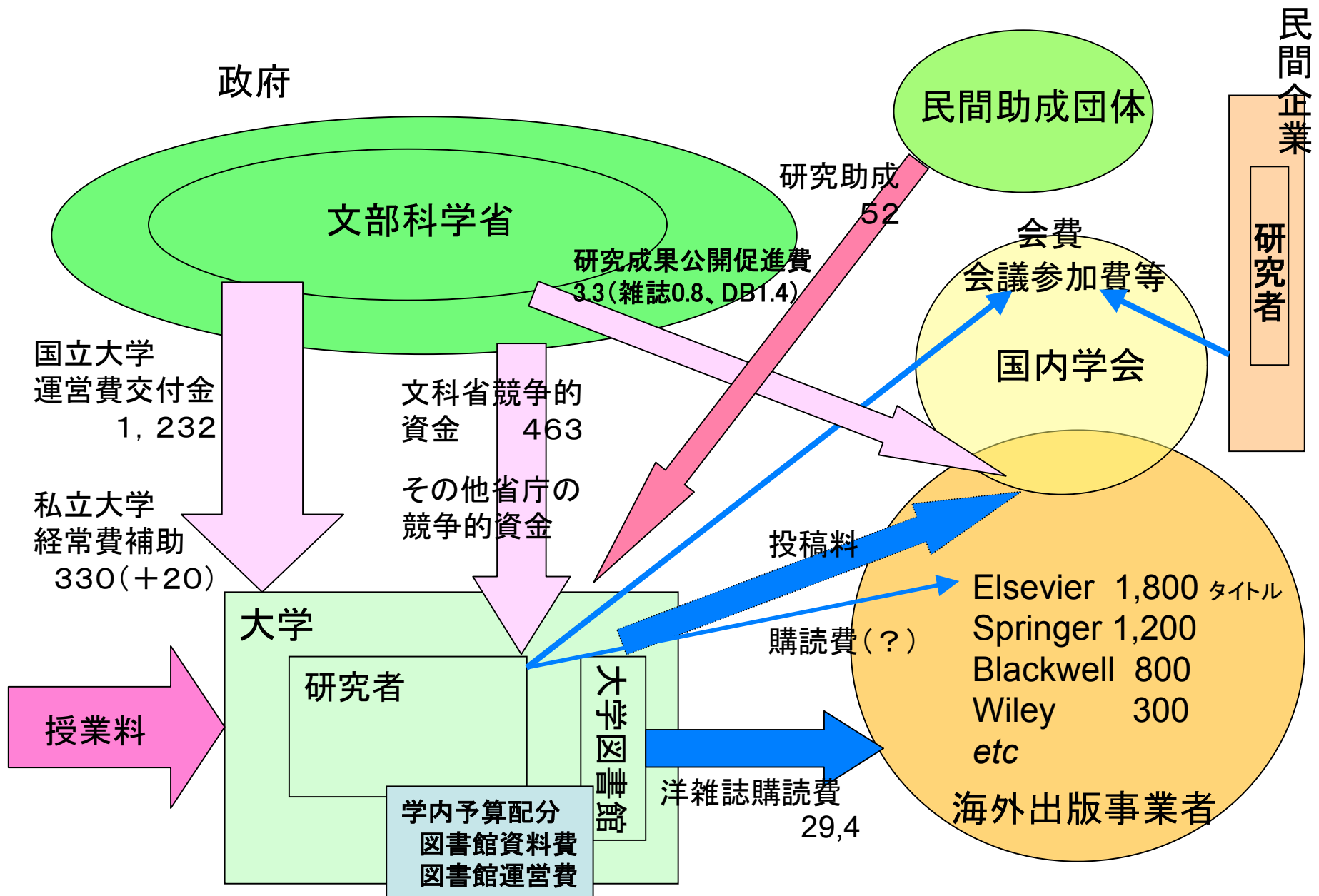
2) 21世紀への動向

- 電子化(電子ジャーナルへ)
- オープンアクセス運動

日本の学術雑誌の課題

- グローバルな成果公開の場となっていない
研究者の「トップジャーナル志向」
IFによる雑誌の序列化
- ビジネスモデルの欠如（学協会誌）
クラブ財であって商品ではない
- 電子化に対応できる資金・技術力不足
- 英文学術誌としての質の確保の困難さ

学術研究と学術情報流通をめぐる資金の流れ(単位:10億円)



関連施策の現状

- 科学研究費補助金研究成果公開促進費
学術定期刊行物／学術誌データベース
- J-STAGE(科学技術振興機構JST)
学協会誌314誌(13万記事) 7.19現在
- NII-ELS
学協会誌792誌(243万記事) 2月末現在

世界に類のない学会誌直接支援

今後の対応策1

1) 日本の学会誌の充実

- 国際的受発信のアンバランスの解消
 - ➡ 日本独自の研究評価機能の確立
- 電子化対応に重点
- 学会支援の競争化／重点化？
 - 既存学会誌支援の継続と重点化？
- 英文編集の質の充実
 - ➡ 人材の養成

今後の対応策2

2) 論文評価の適正化

論文評価にIFを利用すべきでない

新たな指標の開発

3) オープンアクセスへの対応

大学図書館における機関リポジトリ推進

学術コミュニティのルール尊重

4) 永続的アーカイブ構築

各機関・システムの連携

学術情報発信WGの意義

- 問題点は山のようにある
 - 範囲／立場／目的の不明確さ
 - 提言対象と文科省との関係
 - 委員の構成 ……etc
- 学術情報流通全体への関心の喚起
 - 全体の動向把握の上で、大学および大学図書館のあり方が議論できる